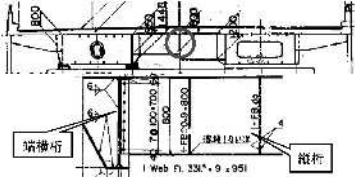
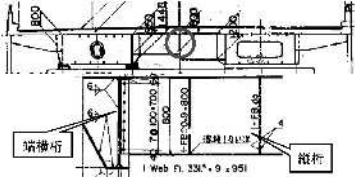
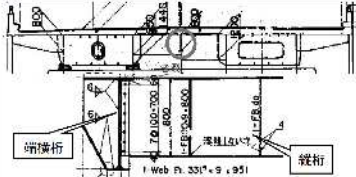
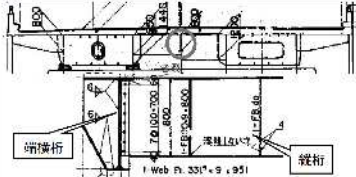
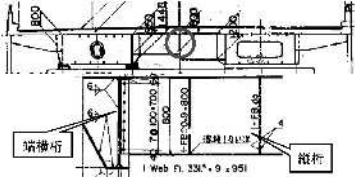
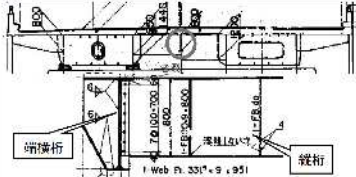


鋼橋の腐食と疲労診断
正誤表

2026/9/28

頁	行 (図表番号)	誤	正																																																																								
238	事例⑧-1 縦桁ウェブ	事例⑧-1 縦桁ウェブ <table><tr><td>判定ランク</td><td>II (経過観察)</td></tr><tr><td>損傷発生部位</td><td>中間縦桁ウェブ</td></tr><tr><td>損傷写真</td><td> 全景  磁気探傷試験結果  </td></tr><tr><td>損傷状況図</td><td>  冗長性と進行性の判定 <table><tr><th>進行性</th><th>冗長性</th><th>小</th><th>中</th><th>大</th></tr><tr><td>大</td><td></td><td>III</td><td>III</td><td>II</td></tr><tr><td>中</td><td></td><td>III</td><td>II</td><td>II</td></tr><tr><td>小</td><td></td><td>II</td><td>II</td><td>I</td></tr></table> </td></tr><tr><td>橋梁形式</td><td>鋼単線合流成箱桁橋 (2 主桁、4 車線)</td></tr><tr><td>損傷状況</td><td> 【磁気探傷試験結果】スカラー波を用いた溶接部の主桁ウェブ側面から主桁材に進展する 27mm の指示模様、および主桁ウェブと支点箱桁材溶接部の主桁ウェブ側面から沿って進展する 75mm の指示模様を確認 【点検時の使用年数】55 年 【直近サンサスデータ】日交通量 57,036 台、大型車混入率 10% </td></tr><tr><td>損傷発生原因</td><td> - 設計上の仮定（ピン支持）と実挙動の違いにより発生する断面力に対する断面不足 - 縦桁ウェブ仕口部のフィレット半径が小さく応力集中しやすいディテールと推測 </td></tr><tr><td>診断内容</td><td> - 中間縦桁は RC 床版の輪荷重を伝達する役割を担っており、き裂の進展は橋梁全体の耐荷力の低下にはつながらないが、き裂の進展により輪荷重の荷重伝達機能が失われると、RC 床版の損傷を引き起こす恐れがある。（冗長性：I） - き裂長は桁高（H=800mm）に対して 65mm と短い。また、使用から 55 年が経過している（進行性：中）。 - 冗長性、進行性を踏まえると、き裂の進展状況を確認しながら経過時期を見極めるのが妥当と考えられるため、経過観察が妥当と判断することができる。 </td></tr></table>	判定ランク	II (経過観察)	損傷発生部位	中間縦桁ウェブ	損傷写真	全景  磁気探傷試験結果 	損傷状況図	 冗長性と進行性の判定 <table><tr><th>進行性</th><th>冗長性</th><th>小</th><th>中</th><th>大</th></tr><tr><td>大</td><td></td><td>III</td><td>III</td><td>II</td></tr><tr><td>中</td><td></td><td>III</td><td>II</td><td>II</td></tr><tr><td>小</td><td></td><td>II</td><td>II</td><td>I</td></tr></table>	進行性	冗長性	小	中	大	大		III	III	II	中		III	II	II	小		II	II	I	橋梁形式	鋼単線合流成箱桁橋 (2 主桁、4 車線)	損傷状況	【磁気探傷試験結果】スカラー波を用いた溶接部の主桁ウェブ側面から主桁材に進展する 27mm の指示模様、および主桁ウェブと支点箱桁材溶接部の主桁ウェブ側面から沿って進展する 75mm の指示模様を確認 【点検時の使用年数】55 年 【直近サンサスデータ】日交通量 57,036 台、大型車混入率 10%	損傷発生原因	- 設計上の仮定（ピン支持）と実挙動の違いにより発生する断面力に対する断面不足 - 縦桁ウェブ仕口部のフィレット半径が小さく応力集中しやすいディテールと推測	診断内容	- 中間縦桁は RC 床版の輪荷重を伝達する役割を担っており、き裂の進展は橋梁全体の耐荷力の低下にはつながらないが、き裂の進展により輪荷重の荷重伝達機能が失われると、RC 床版の損傷を引き起こす恐れがある。（冗長性：I） - き裂長は桁高（H=800mm）に対して 65mm と短い。また、使用から 55 年が経過している（進行性：中）。 - 冗長性、進行性を踏まえると、き裂の進展状況を確認しながら経過時期を見極めるのが妥当と考えられるため、経過観察が妥当と判断することができる。	事例⑧-1 縦桁ウェブ <table><tr><td>判定ランク</td><td>II (経過観察)</td></tr><tr><td>損傷発生部位</td><td>中間縦桁ウェブ</td></tr><tr><td>損傷写真</td><td> 全景  磁気探傷試験結果  </td></tr><tr><td>損傷状況図</td><td>  冗長性と進行性の判定 <table><tr><th>進行性</th><th>冗長性</th><th>小</th><th>中</th><th>大</th></tr><tr><td>大</td><td></td><td>III</td><td>III</td><td>II</td></tr><tr><td>中</td><td></td><td>III</td><td>II</td><td>II</td></tr><tr><td>小</td><td></td><td>II</td><td>II</td><td>I</td></tr></table> </td></tr><tr><td>橋梁形式</td><td>鋼単線合流成箱桁橋 (2 主桁、4 車線)</td></tr><tr><td>損傷状況</td><td> 【点検時】中間縦桁ウェブと梁横桁との溶接部で、縦桁ウェブの仕口部から発生したき裂が 65mm 進展 【点検時の使用年数】55 年 【直近サンサスデータ】日交通量 57,036 台、大型車混入率 10% </td></tr><tr><td>損傷発生原因</td><td> - 設計上の仮定（ピン支持）と実挙動の違いにより発生する断面力に対する断面不足 - 縦桁ウェブ仕口部のフィレット半径が小さく応力集中しやすいディテールと推測 </td></tr><tr><td>診断内容</td><td> - 中間縦桁は RC 床版の輪荷重を伝達する役割を担っており、き裂の進展は橋梁全体の耐荷力の低下にはつながらないが、き裂の進展により輪荷重の荷重伝達機能が失われると、RC 床版の損傷を引き起こす恐れがある。（冗長性：I） - き裂長は桁高（H=800mm）に対して 65mm と短い。また、使用から 55 年が経過している（進行性：中）。 - 冗長性、進行性を踏まえると、き裂の進展状況を確認しながら経過時期を見極めるのが妥当と考えられるため、経過観察が妥当と判断することができる。 </td></tr></table>	判定ランク	II (経過観察)	損傷発生部位	中間縦桁ウェブ	損傷写真	全景  磁気探傷試験結果 	損傷状況図	 冗長性と進行性の判定 <table><tr><th>進行性</th><th>冗長性</th><th>小</th><th>中</th><th>大</th></tr><tr><td>大</td><td></td><td>III</td><td>III</td><td>II</td></tr><tr><td>中</td><td></td><td>III</td><td>II</td><td>II</td></tr><tr><td>小</td><td></td><td>II</td><td>II</td><td>I</td></tr></table>	進行性	冗長性	小	中	大	大		III	III	II	中		III	II	II	小		II	II	I	橋梁形式	鋼単線合流成箱桁橋 (2 主桁、4 車線)	損傷状況	【点検時】中間縦桁ウェブと梁横桁との溶接部で、縦桁ウェブの仕口部から発生したき裂が 65mm 進展 【点検時の使用年数】55 年 【直近サンサスデータ】日交通量 57,036 台、大型車混入率 10%	損傷発生原因	- 設計上の仮定（ピン支持）と実挙動の違いにより発生する断面力に対する断面不足 - 縦桁ウェブ仕口部のフィレット半径が小さく応力集中しやすいディテールと推測	診断内容	- 中間縦桁は RC 床版の輪荷重を伝達する役割を担っており、き裂の進展は橋梁全体の耐荷力の低下にはつながらないが、き裂の進展により輪荷重の荷重伝達機能が失われると、RC 床版の損傷を引き起こす恐れがある。（冗長性：I） - き裂長は桁高（H=800mm）に対して 65mm と短い。また、使用から 55 年が経過している（進行性：中）。 - 冗長性、進行性を踏まえると、き裂の進展状況を確認しながら経過時期を見極めるのが妥当と考えられるため、経過観察が妥当と判断することができる。
判定ランク	II (経過観察)																																																																										
損傷発生部位	中間縦桁ウェブ																																																																										
損傷写真	全景  磁気探傷試験結果 																																																																										
損傷状況図	 冗長性と進行性の判定 <table><tr><th>進行性</th><th>冗長性</th><th>小</th><th>中</th><th>大</th></tr><tr><td>大</td><td></td><td>III</td><td>III</td><td>II</td></tr><tr><td>中</td><td></td><td>III</td><td>II</td><td>II</td></tr><tr><td>小</td><td></td><td>II</td><td>II</td><td>I</td></tr></table>	進行性	冗長性	小	中	大	大		III	III	II	中		III	II	II	小		II	II	I																																																						
進行性	冗長性	小	中	大																																																																							
大		III	III	II																																																																							
中		III	II	II																																																																							
小		II	II	I																																																																							
橋梁形式	鋼単線合流成箱桁橋 (2 主桁、4 車線)																																																																										
損傷状況	【磁気探傷試験結果】スカラー波を用いた溶接部の主桁ウェブ側面から主桁材に進展する 27mm の指示模様、および主桁ウェブと支点箱桁材溶接部の主桁ウェブ側面から沿って進展する 75mm の指示模様を確認 【点検時の使用年数】55 年 【直近サンサスデータ】日交通量 57,036 台、大型車混入率 10%																																																																										
損傷発生原因	- 設計上の仮定（ピン支持）と実挙動の違いにより発生する断面力に対する断面不足 - 縦桁ウェブ仕口部のフィレット半径が小さく応力集中しやすいディテールと推測																																																																										
診断内容	- 中間縦桁は RC 床版の輪荷重を伝達する役割を担っており、き裂の進展は橋梁全体の耐荷力の低下にはつながらないが、き裂の進展により輪荷重の荷重伝達機能が失われると、RC 床版の損傷を引き起こす恐れがある。（冗長性：I） - き裂長は桁高（H=800mm）に対して 65mm と短い。また、使用から 55 年が経過している（進行性：中）。 - 冗長性、進行性を踏まえると、き裂の進展状況を確認しながら経過時期を見極めるのが妥当と考えられるため、経過観察が妥当と判断することができる。																																																																										
判定ランク	II (経過観察)																																																																										
損傷発生部位	中間縦桁ウェブ																																																																										
損傷写真	全景  磁気探傷試験結果 																																																																										
損傷状況図	 冗長性と進行性の判定 <table><tr><th>進行性</th><th>冗長性</th><th>小</th><th>中</th><th>大</th></tr><tr><td>大</td><td></td><td>III</td><td>III</td><td>II</td></tr><tr><td>中</td><td></td><td>III</td><td>II</td><td>II</td></tr><tr><td>小</td><td></td><td>II</td><td>II</td><td>I</td></tr></table>	進行性	冗長性	小	中	大	大		III	III	II	中		III	II	II	小		II	II	I																																																						
進行性	冗長性	小	中	大																																																																							
大		III	III	II																																																																							
中		III	II	II																																																																							
小		II	II	I																																																																							
橋梁形式	鋼単線合流成箱桁橋 (2 主桁、4 車線)																																																																										
損傷状況	【点検時】中間縦桁ウェブと梁横桁との溶接部で、縦桁ウェブの仕口部から発生したき裂が 65mm 進展 【点検時の使用年数】55 年 【直近サンサスデータ】日交通量 57,036 台、大型車混入率 10%																																																																										
損傷発生原因	- 設計上の仮定（ピン支持）と実挙動の違いにより発生する断面力に対する断面不足 - 縦桁ウェブ仕口部のフィレット半径が小さく応力集中しやすいディテールと推測																																																																										
診断内容	- 中間縦桁は RC 床版の輪荷重を伝達する役割を担っており、き裂の進展は橋梁全体の耐荷力の低下にはつながらないが、き裂の進展により輪荷重の荷重伝達機能が失われると、RC 床版の損傷を引き起こす恐れがある。（冗長性：I） - き裂長は桁高（H=800mm）に対して 65mm と短い。また、使用から 55 年が経過している（進行性：中）。 - 冗長性、進行性を踏まえると、き裂の進展状況を確認しながら経過時期を見極めるのが妥当と考えられるため、経過観察が妥当と判断することができる。																																																																										